

提言

来民開拓団の真相と私

毎年8月17日、来民開拓団

の真相を語り継ぎ、二度とこのような悲劇をくり返すまいという願いから、子ども会を中心に、遺族会、区と合同で開拓慰霊祭が行われています。子ども会の代表が、「憎むべきは、恨むべきは、戦争であり差別である。」そのことを来民開拓団の人々は、かけがえのない276柱の命をかけて教えてくれています。」と慰霊の言葉を述べます。

開拓団の事業は、軍事目的の国策として1941年から始まりました。開拓団の人たちは「満州に行けば、きびしい部落差別もなくなる。子どもたちには苦勞をさせたくない。」という思いで参加しました。しかし、自分たちで開拓するはずの中国の土地は、すでに国（日本）が、強制収収（略奪）したものでした。



山鹿市立鹿本中学校

松永 康一 さん

いたムラの人たちの怒りが「たたかいの祭り（後述）」に綴られています。

「はらわたの煮えくり返るような怒りを覚え、また子どもで、

なにもわからず、無邪気な顔で親に手を引かれて行った同級生や仲間の顔が浮かんで仕方がありませんでした。このままじゃいかん。何とかして来民開拓団のことを正しく伝えなければ、という思いがこみ上げてきました。」

ここから、「来民開拓団の真相」を明らかにする取組が始まりました。わかってきたのは、来民開拓団が、部落問題に対する融和政策の一環であつたということです。部落がなくれば部落差別がなくなるという考え方です。来民開拓団の人たちの「子どもに

差別のない暮らしをさせた」という思いを利用したものであつたのです。「来民開拓団の真相」それは、背景に部落差別があるということです。その真相を展望に変えるために、「赤き黄土」「たたかいの祭り」「275人の遺書配達人」といった書籍や紙芝居が作られ、解放劇の取組につながりました。ムラの人たちの解放への思いは、開拓慰霊祭に引き継がれています。

鹿本町では、その思いを教材化して、自分自身と重ねて、「私の来民開拓団の真相」、つまり「自分のくらしを語る」という授業実践を行っていました。

私は母のお腹にいたとき、右足首が伸びたままになっており、生まれてすぐに手術をしました。実家で私を生んだ母は、「足が治るまではこつ

ち（嫁ぎ先）に帰りきらんだつた。」と言っていました。今も足首は半分くらいしか曲がりません。幼少期はその影響で走り方を笑われたこともあります。しかし、足のことで親に不満を言ったことはありません。両親が大事に育ててくれた足です。その母は5年前に癌で亡くなりました。癌とわかったとき母は「私でよかったたい。あんたたちでなくてよかったよ。」と言いました。涙が出ました。私たちを一生懸命育ててきた母の思いの全てがその言葉に込められていました。亡くなったとき「ありがとう」と言おうとしましたが、嗚咽で言葉になりませんでした。「来民開拓団の真相」の学習をするとき、母の「私でよかったたい。あんたたちでなくてよかったよ。」の言葉が思い出されます。